孔子の「礼」思想について

玉　置　重　俊
北海道情報大学

On the “Li” theory of Confucius

Shigetoshi TAMAKI
Hokkaido Information University

平成29年12月

北海道情報大学紀要　第29巻　第１号別刷

〈論　文〉

孔子の「礼」思想について

玉置　重俊*

On the “Li” theory of Confucius

SHIGETOSHI　TAMAKI*

要旨

本論では、孔子の「礼」思想を具体的に考察し、「礼」思想の内容と性格などを究明してゆく。序章では、孔子の「礼」思想研究の意義を論じる。第二章では、孔子の生きた時代と生涯及び諸活動を論じる。第三章では、孔子の理想と魯国の現状及び孔子の対応を論じる。第四章では、『論語』の中から、総合的に「礼」と「楽」の思想を考察して、孔子の「礼」思想が如何にして構築されたのか、またその内容も具体的に分析する。第五章では、孔子が説いた「礼」思想の性格や効果などにも論及する。最終章では、孔子が説いた「礼」思想の基盤を究明し、時代的な意義と価値などを論じる。

Abstract

In this paper, I materialize and discuss “Li” theory, investigating its content and characteristics. In the introduction, I describe the significance of the research of “Li” theory. In the second chapter, the era when Confucius lived will be explained along with his various activities. In the third chapter, Confucius' ideal state of “Lu Guo” and the response of Confucius will be discussed. In the fourth chapter, the discussion of “Li” and “Yue” theories in “Lunyu” will be discussed comprehensively, seeing how Confucius's theory was structured . And its content will also be analyzed. In the fifth chapter, I mention the characteristics of “Li” theory and its effectiveness. In the conclusion, the fundamental of “Li” theory will be investigated and discussed in terms of the epochal significance and value.

キーワード

孔子　『論語』　「礼」「楽」　周公　徳治政治　魯国　礼思想　弟子七十二人

* 北海道情報大学経営情報学部システム情報学科教授，Professor, Department of System Information Science Faculty of Business Administration and Information Science

1．はじめに

中国思想史上において、孔子(BC.551～479)は、もちろん偉大な思想家あるいは教育者として極めて高く評価されており、特に彼が説いた「仁」、「義」、「礼」、「智」、「忠」、「信」、「孝」などの徳目は、孔子の死後も儒家学派の思想家たちにしっかりと継承、発展されながら、また他の学派の思想家たちにも多大な影響を与えて、長く中国及び世界の倫理、道徳思想として存在し続けてきている。

また、『論語』に見える諸徳目は、孔子が色々な状況や場面で説いたものがほとんどで、それらを語った時期や場所も分からず、話した対象者や目的なども多岐に及んでいるため、その徳目の内容や意味などを正確に理解することは、かなり難しい作業となる。ただ、これは、すべて『論語』という書物の編纂方法や性格に帰するので、どうすることもできない問題なのである。

したがって、我々が孔子の説いた徳目の意義や内容を的確に把握するためには、いくつかの準備をする必要がある。第一には、孔子が活躍した時代における彼自身の置かれていた境遇や状況などにも、詳細な目配りが必要不可欠になる。第二には、『論語』という書物全体から、孔子の思想を総合的に分析、検討すべき姿勢も大いに必要とされる。第三には、『論語』の章句をできるだけ正確に読む能力と中国の歴史・文化・制度に対する深い知識などが要求されるのである。

本論では、孔子が説いた諸徳目の中から、「礼」いう徳目に焦点を当てて、その意味内容を着実に検討して、孔子の思想の一端を究明したいと考える。また「礼」という哲理を選択した理由は、『論語』に見える「礼」には、他の徳目とは異なって、多面性と広義性に富んだ意義があるように感じられるからである。

2．孔子の時代と生涯及び諸活動

まず本論に入る前に、準備段階として、孔子の生きた時代の風潮や世相について、いささか触れておこう。孔子が活躍した時代は、春秋時代(BC770～476)末期であって、その時代は、周王朝の権威も大きく失墜して、各国の群雄が割拠する動乱の世の中であった。また、各国の倫理・道徳思想もかなり廃れていたので、その時代では君臣関係も大いに乱れて、実力のある家臣がその国の主君を殺害したり、また放逐したりなどで、家臣たちは自分の覇権と勢力を広げることに躍起になっていた。

このような動乱の世に生を受けた孔子は、幼い頃から、「嬉戯するに、常に俎豆を陳ね、禮容を設く」［1］というように、遊ぶときでさえ、祭器を並べ、その容姿は礼儀にかなっていたとある。つまり孔子は、幼年時代から「礼」の勉強に余念がなかったのである。『史記』「孔子世家」に拠れば、孔子の生涯を次のように短くまとめている。

> 孔子貧且賤。及長、嘗爲季氏史、料量平、嘗爲司職吏而斉畜息。由是爲司空。已而去魯、斥乎齊、逐乎宋、衛、困於陳蔡之間、於是反魯。孔子長九尺六寸、人皆謂之長人而異之。魯復善待、由是反魯。

上の意味は「孔子は家が貧しく、身分も賤しかった。成人になってから、季氏の役人となったが、出納は公平で正確だった。かつて司職（牧畜を管理する）の役人となったが、その六畜は繁殖した。そのため、司空（土地と人民を管理する役人）になれた。その後は、魯を去ったが、斉で排斥され、宋・衛で逐われ、陳・蔡の間で困窮したので、やむなく魯に戻った。孔子は身の丈が九尺六寸［2］あり、人々はみんな長人といって珍しがった。魯はまた良き待遇で迎えたので、また魯に戻った。」となろう。

ここには、孔子の生涯の略歴が要領よく記されている。また、この略歴の箇所に記されていないが、孔子の生涯の活動においては、他に重要な事柄が二つあるので、ここからはそれについて、説明したい。それは、孔子は

なぜなのか相当に若いときから、「礼」の専門家として、高く評価されていた点である。次の「孔子世家」の一節を取り上げてみよう。

孔子年十七、魯之大夫孟釐子病且死、誡其嗣懿子曰、孔丘、聖人之後、滅於宋。……吾聞　聖人之後、雖不當世、必有達者。今孔丘年少好禮、其達者歟。吾卽没、若必師之。及釐子卒、懿子與魯人南宮敬叔往學禮焉。

上の意味は「孔子が年十七歳の時、魯の大夫の孟釐子が病気になり、死んでゆく間際に、跡継ぎの懿子を諫めて、こう言った。孔丘という人物は、聖人の後継者で、祖先は宋に滅んだ。……　私はこう聞いている。聖人の後継者は、君主にはなれないが、達人にはなれる。今、孔丘は年は若いが、礼を好んでおり、達人になる人物だ。私が死んだら、おまえは必ず孔子に師事せよ、と。釐子が亡くなった後、懿子は魯人南宮敬叔と（孔子に）礼を学びに行った。」となろう。このように、孔子は十七歳にして、魯の大夫の孟釐子が礼の専門家として、高く評価し、その上自分の跡継ぎの懿子に、必ず孔子に師事するように厳命したのである。

ただ、「孔子世家」の上の一節には、大きな誤りがあり、魯の大夫の孟釐子が死んでゆくのは、孔子が十七歳の時ではなく、十七年後の三十四歳とする説［３］があり、この説が正しいようだ。したがって、懿子と南宮敬叔が孔子の弟子になったのも、孔子が三十四歳以後になるわけである。筆者の卑見になるが、当時の社会常識や通念を慎重に考えると、やはり孔子といえども、十七歳で「礼」の専門家になって、弟子を取ることは、不可能だと判断したい。「孔子世家」の他の一節にも、孔子が「礼」を学ぶことに関して、興味深い内容が記されているので、紹介したい。

それは、このような話しである。孔子の弟子となった南宮敬叔は、なぜか孔子と周に行って、「礼」を学びたいと、魯の君主に懇願しており、その願いは聞き入れられる。彼らは、周の国に行き、そこでは、老子にも会って、帰り間際に、老子から、以下のような言葉を賜っている。

曰、聡明深察而近於死者、好議人者也。博辯廣大危其身者、發人之惡者也。爲人子者毋以有己、爲人臣者毋以有己。

上の意味は「（老子は）言われた。聡明で深い考えがあっても、死に近いのは、人をそしるのを好む人です。弁舌さわやかで見識が広くとも、我が身を窮地に陥れるのは、人の悪を暴く人です。人の子たる者は、自分に気を配ってはなりません。臣たる者は、自分に気を配ってはなりません、と。」となろう。

ここで説かれた老子の言葉は、「礼」の意義と内容を具体的に説明したものではなく、どちらかと言えば、老子の処世術が吐露されているように思われる。もちろん、孔子が老子に面会し、言葉をもらったとするこの一節も、司馬遷の記述であって、実際の真偽はやはり分からないのである。ただ、上の二節の「孔子世家」の記述により、とにかく孔子は若い頃から、「礼」の専門家として、世の中で、かなりの評判を獲得し、かつ容認されていたことが理解できる。

もう一点、孔子の活動で大事な面に触れると、それは、孔子は中年頃から、「礼」の専門家という評判からなのか、孔子のもとで学びたいという弟子が少しずつ増えている状況である。孔子が周から魯に戻ってからも、弟子は増えているし、五十歳前でも、「孔子世家」には、以下の記述がある。

是以魯自大夫以下皆僭離於正道。故孔子不仕、退而脩詩書禮樂、弟子彌衆、至自遠方、莫不受業焉。

上の意味は「こうして魯の国は、大夫以下みんなおごって上をおかし、正道を離れた。そこで、孔子は仕官せずに、隠退して詩書礼楽を修め弟子に教えた。門人はだんだん多くなり、遠方からも来て、みな学業を受けた。」となろう。要するに、孔子が中年以後より、弟子が益々多くなっている。やや誇張表現に

も思えるが、「孔子世家」の以下の記述も有名である。

孔子以詩書禮樂教、弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人。如顔濁鄒之徒、頗受業者甚衆。

上の意味は「孔子は詩書礼楽を教えた、弟子はおよそ三千人にも及んで、中でも、六芸に通じる者は、七十二人あった。顔濁鄒の徒のように、ある程度の学業を受けた者も極めて多かった。」となろう。ここには、偉大な教育者としての孔子の実績と実力が端的に記されている。

以上、孔子は若いときから、「礼の専門家」として、高い評価を得ていたことと、また、中年の頃からは、かなり多くの弟子を自分の周りに集めて、常時教育していたことの二点を確認しておきたい。

3. 孔子の目指した理想と魯国の現状及び孔子の対応

孔子は、もちろん政治家として活躍できることを生涯の目標としていた。彼の憧れの人物は、周王朝を建国した武王の弟であり、また武王没後は、その子（後の成王）を補佐して、周王朝の政治を担当する摂政を務めた周公旦であった。このことは、『論語』述而篇の次の章句からも認識できる。

子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。

上の意味は「孔先生は言われた。私もすっかり衰えたものだ。随分と長い間、夢に周公を見なくなったね。」となろう。このように、孔子は周公を理想の人物としており、周公その人を深く思慕し、大変尊敬している。これは、周公が周の文化、礼楽、政治制度などの創造に、大きく貢献し、彼自身が直接に関わったことにもよる［4］のだが、同時に、孔子は広く周の文化や制度に対しても、大きな思慕と期待を寄せている。八佾篇（以下『論語』は省略し、篇名のみ記す）に、次の章句がある。

子曰、周監於二代。郁郁乎文哉。吾從周。

上の意味は「孔先生は言われた。周は夏・殷二代の得失に鑑みて、礼制を整えてきた。したがって、その文物制度はまことに美しいものがある。私としては、周の礼に従おう。」となろう。このように、孔子が周の礼制や文化に強く憧れていたことは、間違いのない事実である。次は為政篇の章句を見てゆこう。

子張問、十世可知也。子曰、殷因於夏禮。所損益可知也。周因於殷禮。所損益可知也。其或継周者、雖百世可知也。

上の意味は「子張が十代後の王朝の礼制は知ることができますか、と質問した。孔先生はこう答えた。殷はその前代の夏の礼制の大綱を取って、細目は時勢に合うように削除したり、増加したりしたが、損益した箇所はよく知ることができる。周はその前代の殷の礼制の大綱を取って、細目は時勢に合うように削除したり、増加したりしたが、損益した箇所はよく知ることができる。このように考えると、今後、周の後に起こってくる新しい時代があるとしても、百代の先の礼制までも知ることができよう。」となろう。

ここでは、弟子の子張からの質問に答えて、孔子は「中国の歴代の礼制（典章制度）は、大綱は変わらないが、細目の減少と増加はあり、ただそのわずかな変化は知ることが可能としており、また周以後の王朝の礼制については、百代の先まで理解可能である」と主張している。要するに、孔子は周の礼制の有する貴重な価値と永続性のある文化的意義を明確に説明したのである。

そもそも、孔子の生地である魯国は、歴史的には、周公旦の息子である伯禽に統治が任されたので、もちろん周の礼制は自然と魯国に継承され、かつ保存された可能性が高いと思われる。『春秋左氏伝』昭公二年に、以下の記述がある。

觀書於大史氏、見易象與魯春秋、曰周禮盡在魯矣。吾乃今知周公之德與周之所以王也。

上の意味は「大史のところで文書類を一覧し、

『周易・象』・『魯春秋』を見て、（韓宣子は）言った。周の礼はすべてが魯に保存されていますね。周公の徳と、周が王者になれたわけが私にはやっと分かりました。」となろう。このように、「周の礼はすべてが魯に保存されている」とはっきりと記されている。また、雍也篇にも、次の章句が見える。

子曰、齊一變、至於魯。魯一變、至於道。

上の意味は「孔先生は言われた。斉の国は今少し変化して進歩したならば、今日の魯国程度にはなるであろうし、魯の国は今少し変化して進歩したならば、道に到達するであろう。」となろう。このように、孔子は魯国の現状における文化水準・文物遺産を高く評価して、その将来における可能性に対しても、極めて大きな期待を抱いている。とにかく、これらの記述は、「周礼」及びこれに関係する文物・制度が魯国にそっくりそのまま保存されていることの証左になるはずである。

したがって、孔子は持ち前の向学心から、魯国において、しっかりと保存されている「周礼」や文物・制度を自分で、大いに学んだことは推測できる。公冶長篇に、次の章句が見える。

子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。

上の意味は「孔先生は言われた。戸数十軒程度の小さい村にも、忠信が私ほどの者は必ずいるが、私ほどの学問好きはいないだろう。」となろう。このように、極めて学問好きな孔子は、非常に積極的にかつ精力的に、「周礼」や文物・制度の習得に尽力したと思われる。このことは、次の子張篇の章句からも、理解できる。

衛公孫朝、問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道、未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學。而何常師之有。

上の意味は「衛の公孫朝が子貢にたずねて言った。仲尼（孔子の字）は誰について学問をされたのですか。子貢は答えた。文王や武王の道は、地に落ちて滅びてしまったわけではなく、人々の間に残っています。賢者はその中の大なるものを学び取り、不賢者はその中の小なるものを学び取るのである。文王と武王の道は、世の中のどこにでもあるのです。先生は、世の中の誰にでも学ばれました。しかし、特定の先生について、学んだことはありません。」となろう。この記述からも、孔子は魯国に保存された周の文化・文物及び礼制を、彼自身が独学で色々な人々から、確実に習得していたことが、看取できる。

したがって、孔子が周の文化、文物、礼制を習得するためには、魯国が極めて良い地理的環境と歴史的条件を備えていたことは、確かであった。要するに、春秋時代末期においても、魯国は他国に比べて、周公が創作した西周文化の遺産や遺風が豊富に残っていて、「周礼」の高くて成熟した教養や文化、文物は、しっかりと保存されていたのである。逆に言えば、魯国の高くて成熟した文化や風土そして歴史などが、積もり積もって、その蓄積の成果として、孔子のような偉大な人物を創出できたとも言えるかも知れない。

ただ、孔子が活躍した時代の魯国の君臣関係及び政治的な現状は、どのようなものだったであろうか。これについても、いささか触れておきたい。孔子は春秋時代末期の君臣関係が大いに乱れた時期に遭遇していて、魯国もその例外ではなく、国の君主の権威は名ばかりで、国の実権は三桓子（孟孫子・叔孫子・季孫子）という大夫に奪われていた。先ずは、魯国大夫の僭越と横暴に対する孔子の大きな憤りが見られるので、取り上げてみたい。八佾篇には、次の章句がある。

孔子謂季氏八佾舞於庭。是可忍也、孰不可忍也。

上の意味は「孔子は魯の大夫の季孫子を批評して、言った。彼は天子の用いる八佾の舞を自分の庭において、舞わせている。この非礼を辛抱できるなら、どんなことだって辛抱できよう（私には我慢できない）［5］。」と

なろう。ここでは、魯国の一家臣にすぎない季孫子が、天子にしか許されていない「八佾の舞」を自分の庭で行ったことを、孔子は極めて厳しい言葉で非難している。次の八佾篇の章句も、見てゆこう。

三家者以雍徹。子曰、相維辟公、天子穆穆。奚取於三家之堂。

上の意味は「魯の三家では、宗廟の祭の後に、雍の歌を歌いながら、供物を捧げた祭器を取り下げた。これに対して、孔子は言われた。雍の歌の文句に、天子の祭りに当たっては、諸侯が相寄ってお手伝いをし、天子は奥ゆかしく控えておられるとある。この歌からも、この雍の歌をどうして（ただの陪臣にすぎない）三桓の堂において、取りもちいようか。」となろう。このように、孔子は、天子の礼を無視するこれら三桓の非礼な行為に対しても、厳しい批判を加えている。このように、「周礼」の価値や内容に造詣の深い孔子には、魯の三桓たちの非礼な行為はどこが悪いのかも、具体的に分かり、どうしても糾弾せざるを得なかったと思われる。

したがって、魯国における孔子の立場は、それほど安定していたわけではなく、君臣間での争いや不義などがあれば、孔子は自分の国をも去らなければならない境遇におかれていたと判断できる。また、魯国の人々も孔子が説いた「礼」の内容や意義については、実際のところは、あまり理解できていなかったようだ。同じ篇には、次の章句もある。

子入大廟、每事問。或曰、孰謂鄹人之子知禮乎。入大廟、每事問。子聞之曰、是禮也。

上の意味は「孔子が大廟に入って、祭りにたずさわったことがあった。そのおりに、孔子は一つ一つの儀礼について、先輩たちに訊ねた。そうすると、ある人は、鄹人の子［6］は礼をよく知っているという評判なのに、大廟に入ってからは、すべてたずねている（実際は孔子は礼を知らないのかも）と言った。孔子はこの言葉を聞いて、これが礼なのですと言われた。」となろう。ここでは、章句の内容から、二つのことが確認できる。一つは、ある人からの「鄹人の子は礼をよく知っている」という言葉から、確かに孔子は当時においては、「礼」の専門家として、認定されていたことと、もう一つは、儀式の細かい礼法や規則をすべて理解していることが重要なのではなく、何事も確認しながら慎重に行う、謙虚な姿勢こそが「礼」の本質であるという点であろう。ただ、この章句での孔子の最後の言葉は、やや負け惜しみの言説に判断される可能性もあるが、それでも、あなたたちは「礼」の本質をよく知らないのですという、孔子からの正式な反論にもなりうるのである。同篇の次の章句を見てゆこう。

子曰、事君盡禮、人以爲諂也。

上の意味は「孔先生は言われた。私が君に仕えるのに、当然なすべき礼を尽くすと、人々は君にこびていると考える。」となろう。ここでも、世の人々が「礼」の本質や意義について、ほとんど理解できていないことを孔子は深く嘆いている。同じく八佾篇には、以下の章句がある。

林放問禮之本。子曰、大哉問。禮與其奢也寧儉。喪與其易也寧戚。

上の意味は「林放という人物が、孔子に礼の根本は何ですかと訊ねた。孔子は、その質問は大きなものですねと答えて、こう言われた。礼というものは、分を超えて派手に行うよりも、できるだけ控えめにするのがよいし、葬礼も、すべて順調に整っていくよりは、むしろ心からの哀惜の情を以て臨むのがよい。」となろう。ここでも、孔子は「礼」の根本を明確に説明しているのだが、以上の章句からも、当時の人々には、孔子が重視した「礼」の意義と内容が実際には、よく理解できていなかったことも、十分に窺うことができる。

4．「礼」、「楽」に関する章句の具体的な考察

この節からは、孔子が説いた「礼」とは、具体的には、どのような価値と意義を有して

いるのか、詳細に考察してゆこう。先ずは、孔子の「礼」の尊重と継承こそが最も大事とする考え方である。これは、孔子と弟子との会話から、明確に推察できる。八佾篇の章句を見てゆこう。

子貢欲去告朔之餼羊。子曰、賜也爾愛其羊。我愛其禮。

上の意味は「子貢は、（すでに虚礼になっている）告朔の礼［６］に用いる餼羊（生きた羊）は、やめた方がよいという議論を始めた。これに対して、孔子は弟子の名前を直接に呼んで、おまえは羊を惜しんでいるが、私はその礼がなくなってしまうのを惜しむのだ。」となろう。ここでは、虚礼は廃止すべきという有能な弟子である子貢の提案に対して、孔子が伝統的な「礼」の継承と保存こそが、今を生きる我々にはとても必要なことと考え、反対している。おそらく、孔子はその「礼」の持つ意義と精神を重要視したのであろう。次の陽貨篇の章句はかなり長いのだが、「礼楽」に関して、やはり弟子と孔子の対話が記されるので、見てゆこう。

宰我問、三年之喪、期已久矣。君子三年不爲禮、禮必壞。三年不爲樂、樂必崩。舊穀既没、新穀既升。鑽燧改火。期可已矣。子曰、食夫稲、衣夫錦、於女安乎。曰、安。女安則爲之。夫君子之居喪、食旨不甘。聞樂不樂。居處不安。故不爲也。今女安則爲之。宰我出。子曰、予之不仁也、子生三年、然後免於父母之懐。夫三年之喪、天下之通喪也。予也有三年之愛於其父母乎。

上の意味は「宰我はたずねた。三年の喪は、まる一年でも、十分な長さです。君子が三年も礼を修めなければ、礼は必ずすたれましょう。三年も楽を修めなければ、楽は必ずだめになります。古い穀物がなくなって新しい穀物が実り、火取りの木をこすって、火を作り替えるというように、まる一年で止めてもいいでしょう、と。孔先生は言われた。（親が死んで三年も経たないのに）あの米を食べ、錦を着るということが、おまえにとって、何ともないのか。宰我は何ともないですと答えた。おまえが何ともないなら、そうしなさい。君子が喪に服している時には、うまいものを食べてもうまくないし、音楽を聞いて楽しくないし、住居にいても落ち着かない、だからそうしないのだ。おまえが何ともないなら、そうしなさい、と。宰我が退出すると、孔先生は言われた。予（宰我）は不仁である。子供は生まれると、三年経ってやっと父母の懐から離れる。あの三年の喪は、世界が認めた喪である。予にしても、その父母から三年の愛を受けたことであろうよ。」となろう。

ここでは、弟子の宰我が孔子に対して、「三年の喪」は長すぎるので、二年短縮して「一年の喪」で、十分ではありませんかと訊いている場面である。孔子の答えは、はじめはお前が何とも思わないなら、それもいいとしたが、最後では、宰我を不仁と認定して、「三年の喪」が天下の通喪であることを明確に説明している。

このように、孔子は弟子との直接対話を通して、「三年の喪」の必要性とその理由を具体的に主張したのである。上の二節は、孔子が自分の弟子との直接対話を通して、彼の「礼」に対する見解を披瀝したのだが、このような場面は、『論語』の中では、随所に見ることができる。したがって、孔子は多くの周りにいた弟子たちと、常時、対話や討論を行うことを通して、彼自身の学説や思想を一段と明確化し、体系化させることができたとも考えられる。つまり弟子たちの存在と彼らからの問題意識及び提起などは、孔子自身が哲学思想を形成し、それを深化・発展させるためには、大いに役に立っていたと言える。

ところで、上の一節では、「礼」」と「楽」が並称されており、それぞれの効用と役割も把握されている。これからは、『論語』の中から、「礼楽」が並称される章句を取り出してみる。八佾篇の章句には、次の記載がある。

子曰、人而不仁、如禮何。人而不仁、如樂何。

上の意味は「孔先生は言われた。ある人が不仁であれば、（その人は心の根本が欠けているので、）礼楽を行おうとしても、何の意味もないのだ。」となろう。ここでは、人間が「礼楽」を実行する場合には、「仁」という徳目が必要になることを教えている。逆に言えば、「仁」の心を有する人間こそが、きちんとした「礼楽」を実践できると力説するのである。陽貨篇の次の章句にも、同様に孔子の見解が現われる。

子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉。樂云樂云、鐘鼓云乎哉。

上の意味は「孔先生は言われた。礼だ礼だと言っても、それは玉や絹布のことだろうか。楽だ楽だと言っても、それは鐘や太鼓のことだろうか。（いや違う。礼や楽の有する精神こそが大切なのである）」となろう。ここでは、孔子の「礼楽」に対する考え方が説かれていて、「礼楽」では物や楽器を整える形式よりも、それらの有する精神こそが大切だと主張している。

先進篇には、次の章句も見える。

子曰、先進於禮樂、野人也。後進於禮樂、君子也。如用之、則吾從先進。

上の意味は「孔先生は言われた。先輩は儀礼や音楽については、粗野な田舎者である。後輩は儀礼や音楽については、洗練された教養人である。もし私が礼楽を用いるときには、先輩に従おう。」となろう。ここでは、孔子は「礼楽」には、洗練された形式を重視する必要はなく、その純朴な内容こそがより大切だと説いている。このように、孔子の時代では、世の中では「礼楽」の併称は一般的なこととなっており、哲学概念として定着しているのが理解できる。

また、子路篇には、孔子と弟子との率直で明快な対話問答もあるので、検討してみたい。弟子の子路からの質問に始まる問答は、こうである。もしかりに、先生が衛の国の政治を任された場合には、どんなことから始めますかという内容だが、孔子はすぐに「名を正しくしたい」と回答したのである。その後の子路からの孔子に対する直言には、孔子は厳しく子路の態度と言行を批判しながら、彼自身の見解をこのように展開している。

子曰、……名不正、則言不順。言不順、則事不成。事不成、則禮樂不興。禮樂不興、則刑罰不中。刑罰不中、則民無所措手足。……

上の意味は「孔先生は言われた。……名が正しくないと、言葉も順当でなくなり、言葉が順当でないと、世の中の万事が成り立たなくなる。世の中の万事が成り立たなくなれば、儀礼や音楽も盛んにならない。儀礼や音楽が盛んにならなければ、刑罰も正しく行われない。刑罰が正しく行われなければ、人民は（不安で）手足の置き所もなくなる。……」となろう。ここでは、国家を安定的に統治するためには、どうしても「礼楽」の思想は必要不可欠と孔子が認識している。季氏篇に、次の文が見える。

孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出。天下無道、則禮樂征伐自諸侯出。自諸侯出、蓋十世希不失矣。自大夫出、五世希不失矣。陪臣執國命、三世希不失矣。……

上の意味は「孔先生は言われた。天下に道が行われる場合には、礼楽と征伐の大権は天子より発動される。しかし天下に道が行われない乱れた世になると、礼楽と征伐の大権は諸侯より発動される。諸侯から発動されると、世の統治はうまくいかず、十代でほとんど滅びてしまう。大夫から発動されると、五代でほとんど滅びてしまう。陪臣が国命を自ら取るようになると、三代にしてほとんど滅びてしまう。……」となろう。ここでは、国家の統治のためには、「礼楽」と「征伐」の発動は、天子によって実行されるのが最高の状態であって、これが諸侯から陪臣に下がってゆくほど、国家は滅亡してしまう期間が短くなると、孔子は説明するのである。

このように、「礼」と「楽」が並称されて、また哲学の思想概念として、頻繁に使用され

る時代は、まさに孔子が活躍する時期からのことであり、これも、孔子の独創的な学説の一つになるかも知れない。実際のところ、孔子自身は、大の音楽好きであり、それは、次の章句などからも容易に看取できる。

子在齊、聞韶樂三月。不知肉味。曰、不圖爲樂之至於斯也。

上の意味は「孔子が斉の国で数ヶ月の間、（古の聖天子である舜の徳を讃えた）韶の音楽を聞いて、学んだ。（すっかり感動して）肉を食べてもその旨さも分からなかった。そして言われた。思いもよらなかった。音楽というものがこんなに素晴らしいとは。」となろう。ここでは、孔子は斉の国で聞き、学んだ韶の音楽の素晴らしさを絶賛している。また、八佾篇には、次の記載がある。

子謂韶、盡美矣。又盡善也。謂武、盡美矣。未盡善也。

上の意味は「孔先生は、こう批評された。韶の音楽は、美をつくしているし、善もつくしている。（周の武王の徳を讃えた）武の音楽は、美を尽くしてはいるが、まだ善を尽くしていない、と。」となろう。ここでは、孔子の音楽に対する知識と理解は相当に高かったことが説かれている。泰伯篇には、次の章句もある。

子曰、興於詩、立於禮、成於樂。

上の意味は「孔先生は言われた。人間の教養は、詩によって奮い立ち、礼によって安定し、楽で完成する。」となろう。ここでも、孔子は「礼楽」の思想を人間の教養を完備するための重要な徳目と認識している。孔子は、「楽」の有する意義と効果を再認識して、「楽」の哲学概念としての価値を、当時の社会や人々に、一段と高く提唱したのである。

5．孔子が説いた「礼」の性格

この節からは、孔子が説いた「礼」思想の性格について、具体的な考察を深めたい。春秋時代末期において、孔子が「礼」思想を特別に重視して、その政治的かつ道徳的活用を人々に促した目的と意義などを、『論語』全体から総合的に、改めて検討してゆこう。先ずは、国家の統治に関する政治的な「礼」を見てみる。

為政篇には、次の章句がある。

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥。道之以德、齊之以禮、有恥且格。

上の意味は「孔先生は言われた。民を導くのに政令法律を用いて、また政令法律に従わない者を統制してゆくのに刑罰を用いるならば、結局、民は刑罰を免れさえすれば何をやってもよいとして、悪を恥ずかしいと思う心がなくなる。反対に、道徳を用いて民を導き、礼という準則を用いて民に統制を加えてゆくと、自然と民は恥を知るようになり、かつ善に至るようになる。」となろう。ここには、孔子が説いた「徳治政治」の内容と効果が、具体的に説明されている。特に、国家の統治の中でも、人民を安定的に管理するためには、「徳」と「礼」の思想の併用が必須だと主張している。

ただ、孔子の政治学説の斬新さを証明するためには、周の時代、特に春秋時代（BC.770～476）における政治制度の状況をいささか考察する必要があろう。したがって、これからは『春秋左氏伝』に拠って、春秋時代の政治制度の概況を把握してゆきたい。「礼」という言葉が出て来る文を検討してみる。隠公十一年（『春秋左氏伝』は省略する）に、次の文が記されている。

君子謂鄭莊公於是有禮。禮、經國家、定社稷、序民人、利後嗣者也。

上の意味は「君子は言われた。鄭の荘公はかくてこそ礼があるといえる。礼とは、国家を整え、社稷（国家の最も大切な守り神）を鎮め、人民の秩序をつくり、子孫に幸いを残すものである。」となろう。また、僖公十一年に、以下の文が見える。

禮、國之幹也、敬、禮之輿也。不敬、則禮不行、禮不行、則上下昏、何以長世。

上の意味は「礼は国の根本、敬は礼の乗り物

である。尊敬しないと、礼は実行できず、礼が実行できなければ、上と下は混乱してどうしてその世を長く保持できましょう。」となろう。襄公三十年には、次の文が見える。

子駟氏欲攻子産。子皮怒之、曰、禮、國之幹也、殺有禮、禍莫大焉。乃止。

上の意味は「子駟氏は、子産を攻めようとした。子皮は怒り、こう言った。礼は国の根本であり、礼を尊重する人を殺すことほど、大きな禍根はない、と。そこで、とりやめになった。」とならう。上の二節には、「礼は国の根本である」という考え方が説かれ、また「礼」及び「敬」の両者は、とても尊重されている。襄公三十年の記述では、子皮は「礼を尊重する子産を殺しては、大きな禍となる」と説いている。下の二節も、見てゆこう。昭公二十五年に、次の文がある。

簡子曰、敢問、何謂禮、對曰、吉也聞諸先大夫子産曰、夫禮、天之經也、地之誼也、民之行也。

上の意味は「簡子は言われた。では聞くが、何を礼というのか。それに答えて、吉は亡くなった大夫子産から聞きましたが、礼とは、天の道であり、地の道理であり、民の行動規則である、と。」となろう。同じく昭公二十五年に、以下の文も見える。

禮、上下之紀、天地之經緯也、民之所以生也。是以先王尚之。

上の意味は「礼は、上下を束ねるきまり、天地の不変のみちすじ、民の生まれる本です。だから、先王はこれを尊んだのです。」となろう。

以上、春秋時代においては、「礼」の価値と意義はもちろん高く評価されていたが、それを具体的に運用して、民を統治するところまでは、踏み込めなかったのではないだろうか。民を導くのに、道徳や「礼」の概念を積極的に活用する風潮は整っていなかったと思われる。

したがって、孔子が世に出て、革新的な政治学説を広く主張するようになると、「礼」の重視と活用とが、世の中で再認識されて、広く力説され始めたと考えられる。同じく八佾篇の次の章句も、見てゆこう。

定公問、君使臣、臣事君、如之何。孔子對曰、君使臣以禮、臣事君以忠。

上の意味は「定公がたずねた。君が臣を使い、臣が君に仕えるには、いかなる道がありますか。孔先生は答えた。君が臣を使う場合に礼を用いるならば、臣は君に仕えるのに忠を用いるものです。」となろう。ここでは、君臣関係においては、君が臣を使う場合には、「礼」の準則が必要であり、それがあってこそ、臣が君に対して、「忠」の態度で仕えるものだと主張している。同じく八佾篇には、次の章句もある。

子曰、居上不寛。爲禮不敬。臨喪不哀。吾何以觀之哉。

上の意味は「孔先生は言われた。人の上となって、民に臨む場合に寛大ではなく、礼を実行する場合に、敬の気持ちがなく、葬式に臨んで哀悼の気持ちがなければ、私はどのようにして、その人物の価値を見ることができようか。」となろう。ここでは、為政者が「礼」を実践する場合には、「敬」や「哀悼」という徳目も当然必要なものとされる。

里仁篇には、次の章句がある。

子曰、能以禮讓爲國乎、何有。不能以禮讓爲國、如禮何。

上の意味は「孔先生は言われた。政治をなすに当たって、人に譲るという精神で国を治めることは、普通のことで何でもないが、もし礼譲の精神で国を治めることができなければ、礼（制度文物）が整っていても、何らの効果ももたらすことはできない。」となろう。ここでも、国家の統治には、「謙譲」という徳目がどうしても外せないものとして説かれている。

要するに、孔子が説いた「礼」は、当時の人々には、何か特別で、新しい意義を有する神秘的な哲理に思われていた可能性が高いのである。このような状況は、以下の八佾篇の

章句にも、現れている。

子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也。殷禮吾能言之、宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣。

上の意味は「孔先生は言われた。夏の礼については話すことはできるが、（その子孫である）杞の国では証拠が足りない。殷の礼については話すことはできるが、（その子孫である）宋の国では証拠が足りない。古い記録が足りないためである。もし十分ならば、私はそれを証拠にできるのだが。」となろう。ここでは、孔子は、夏、殷の王朝の礼制に対する理解度が極めて高いことを伝えており、もちろん歴代の礼文化に対する教養と学識にも、大きな自信を抱いている。ただ、いささか問題点を指摘すれば、上の章句での「話すことはできる」が「証拠が足りない」という孔子の言説には、大きな疑念が生じ得るのである。要するに、孔子は世の人々には、夏、殷王朝の「礼」内容をはっきり語ることはできるが、その実際の証拠はまったく出せないという結末になっている。

したがって、この章句は、ある意味では、孔子の案出した「礼」の概念には、どうしても何らかの神秘性と独創性が確実に伴うことを表出している。さらに、孔子が用いた「礼」という概念は、夏、殷、周と継承されてはいるが、それぞれの時代に拠って、多少の損益を受けていることも確かである。したがって、孔子の説く「礼」は、西周時代の初期ものとは、まったく同じものではなく、ある程度は多少の損益を受けた可能性もある。とにかく、孔子の説く「礼」は、決して固定化されたものではなく、時代ごとに、ある程度の損益を受けながら、変化してゆくものなのである。ここにまた、孔子が「礼」を運用する際には、時代への柔軟な対応力を見て取れるのである。

これからは、人間の個人的な生活に関する道徳方面の「礼」を取りあげて、検討したい。為政篇に、次の章句があるので、見てゆこう。

孟懿子問孝。子曰、無違。樊遲御。子告之曰、孟孫問孝於我。我對曰、無違。樊遲曰、何謂也。子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮。

上の意味は「（魯の大夫の）孟懿子が親孝行の道を質問した。これに対して孔先生は、違うことなかれと答えた。（孟懿子がその意味を理解したかどうかは分からないが、彼はそれ以上深く問うことはなかった。）その後、門人の樊遲が孔子の車を御していた際に、孔先生は前のいきさつを話した。それを聞いてさすがに樊遲は、どういう意味ですかと訊ねてきた。そこで、孔先生は、親の存命中は、身分を超えない礼という準則で親に仕え、親が亡くなったときは、これもまた、礼という準則で葬り、礼を用いて年忌の祭りを営むと答えた。」となろう。ここには、人間が「孝」という徳目を行う場合の準備や方法が説かれているが、とにかく親に対しては、生存中、葬式の折、また死後においても、「礼」という準則の使用が、必要不可欠となると孔子が強調している。泰伯篇には、次の章句が見える。

子曰、恭而無禮則勞。愼而無禮則葸。勇而無禮則亂。直而無禮則絞。

上の意味は「孔先生は言われた。恭しくして礼によらなければ骨が折れる。慎重にしても礼によらなければいじける。勇ましくしても礼によらなければ乱暴になる。まっすぐであっても礼によらなければ窮屈になる。」となろう。ここでも、人々が社会において、「恭」・「慎」・「勇」・「直」という徳目を実践する場合にも、過度になってはやはり弊害が出るので、それを「礼」という準則で、適度に抑制することが大切と考えている。

子罕篇には、次の章句がある。

子曰、麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上、泰也。雖違衆、吾從下。

上の意味は「孔先生は言われた。（礼服としては）麻の冕（冠）が正式の礼である。この頃は木綿糸にしているのは、倹約のためであ

る。私も世俗の習慣に従おう。臣たる者が君を拝する場合には、堂下において行うのが正式の礼である。しかし、この頃は堂上において君を拝しているのは、やはり傲慢である。そこで、世間の人々とは違っても、私は堂下で拝することに従おう。」となろう。ここでは、道に影響を与えない細事であれば、世俗の習慣に従うけれど、大事な「礼」の問題となれば、やはり正道に従うという主張になっている。

ここからは、「仁」と「礼」の徳目が話題になる顔淵篇の章句を見てゆこう。

顔淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。顔淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顔淵曰、回雖不敏、請事斯語矣。

上の意味「顔淵が仁を質問した。孔先生は答えた。我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返るのが仁である。もしある人が一日でも我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返ることができれば、天下の人々がみな仁に帰するようになるであろう。仁は自分の力でできるのであって、他人の力によるのではない。顔淵は、その要点を教えてくださいと言った。孔先生は言われた。礼でなければ、見てはいけない。礼でなければ、聞いてはいけない。礼でなければ、言ってはいけない。礼でなければ、動いてはいけない。顔淵は、答えた。私は愚鈍ではありますが、これらの言葉を実践できるよう努めます、と。」となろう。この章句は、孔門の一番の秀才である顔回が、孔子が説いた最高の哲理である「仁」について、質問しているので、極めて注目された内容になっている。ここでは、孔子が「仁」の実践には、「礼」という準則との合一が必要と説いたことと、また孔子は「克己復禮爲仁」という古諺を取りあげて、その古諺に新しい命を与えたことの二点を、しっかり把握する必要がある。『春秋左氏伝』昭公十二年に、次の文がある。

仲尼曰、古也有志。克己復禮爲仁也。

上の意味は「仲尼は言われた。古諺に書いてある。『我が身の私欲を抑制して、礼の準則に立ち返るのが仁である。』」となろう。このように、孔子は当時にあった古諺の言葉をうまく引用し、弟子の顔回の質問に答えて、自分の哲理を主張している。

さて、中国古代で、孔子が一番早く、君子養成のための塾（私立学校）を開いたことは、有名なことだが、その塾の中では、孔子は弟子たちを理想的な政治家に育てようと、教育の仕事に専念していた。孔子は、弟子たちに常日頃、どのような言葉や訓戒を授けていたのであろうか。雍也篇の次の章句には、こう記されている。

子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。

上の意味は「孔先生は言われた。君子は広く書物を読んで、それを礼の実践で引き締めていくなら、道に背かないでおられるだろうね。」となろう。ここには、教養ある君子といえども、自分自身の行動は、「礼」の準則や規範で引き締める必要があることが、説かれている。

また、『論語』の堯曰篇は、最後の二十篇目になるのだが、またその一番終わりには、次の章句が見える。『論語』の最終章句の孔子の言葉である。

子曰、不知命、無以爲君子也。不知禮、無以立也。不知言、無以知人也。

上の意味は「孔先生は言われた。天命が分からないようでは、君子にはなれない。礼を分からないようでは、人として立つことはできない。言葉が分からないようでは、人を知ることができない。」となろう。このように、孔子は、「命」・「礼」・「言」という三つの哲学概念をしっかり体得できなければ、教養ある人物にはなれないと最後に強調している。とにかく、孔子がどれほど「礼」という徳目は人間の生活には、必須なものであると考えていたことが、十分に理解できる。

６．おわりに

これまで、専ら孔子の「礼」思想について、考察を加えてきたが、孔子の説いた「礼」には、前節までの多面的な考察で、様々な内容と性格を有することが明らかにできた。孔子が若いときより、「礼」の専門家と評価されて、それを見事に実践できたのには、大きくは二つの理由が考えられる。

その一つは、孔子が魯国という、西周時代の高い文化遺産がよく保存された国に、幸いに生を受けて、彼自身が積極的にかつ独学で、それらの文化遺産・文物及び遺風などを全身全霊で吸収した点である。もう一つは、当時の社会的要請なのか、孔子のもとに、中国全土からいろいろなタイプの弟子たちが集結し、孔子を傑出した偉大な教師と見なして、社会のあらゆる問題に関して、常日頃、討論や議論を続けてきた。このような状況は、もちろん孔子自身が自分の思想や哲理を創作し、構築する上でも、最高にして最善の研究と勉学環境になったはずである。

さらには、孔子が年を重ねるうちに、彼自身の世間における評判と知名度も高まり、各国の君主に接見する機会も増えたが、遺憾ながら、孔子が「徳治政治」を実践できる場所や環境は、生涯見つからなかった。要するに、孔子は優秀な政治家になる夢を果たすことはできなかったが、晩年は魯国での孔子塾において、「仁」・「義」・「礼」・「信」・「孝」などの諸徳目について、優秀で愛すべき多くの弟子たちと、一緒に議論、討論しながら、奥深い学問ができたうえに、また諸経典の整理にも尽力できたことは、やはり孔子にとっては、無上の喜びと幸福になったはずである。

最後に、孔子が説いた「礼」思想の時代的な意義と価値を語ると、春秋時代の社会の中でも、「礼」という思想は尊重されていたことは事実だが、この思想を高く掲げて、人民を統治する政治に活用できる人物はいなかった。ただ、孔子が魯国で活躍し始めてからは、国家を統治する政治の面でも、また人民の日常生活の面においても、常時「礼」思想が話題になり、その効果的運用が再認識され、かつ重要視されたのである。いわば、「礼」の専門家としての孔子の登場は、その時代の社会的要求に合致していた。また、実際に、その当時では、「礼」に関する教養や学識において、孔子を超える人などまったく存在しなかった点も、孔子が「礼」思想を広く提唱し、人々の啓蒙を図るうえでも、大きな推進力となったのである。

したがって、孔子が自分の「礼」思想をいささか神秘的な哲学、あるいは独創的な学説に見えるように、主張したとしても、世の中の人々は、ほとんど容認することしかできなかったと思われる。ただ、そのような活動は、孔子が優秀な政治家として、どこかの国に仕官したいという欲求と強く結びついていたことは間違いない。

とにかく、孔子の道徳的かつ政治的な言行や活動、及び彼の創造した「礼」思想は、世の中の君主や人民に対して、測り計り知れない価値と意義をもたらしたことは、言を俟たない。

（注釈）

［１］－『史記』「孔子世家」参照。

［２］－周代の一尺は、現代の２２．５ｃｍなので、孔子は２ｍ以上の大男になる。ただ、真偽はもちろん不明。

［３］－『論語人物考』（春陽堂書店、１９３７年５月）Ｐ１１０。あるいは、幺峻洲『論語問答』（齊魯書社、２００４年１０月）Ｐ１１～１２．またＰ６４を参照。

［４］－『春秋左氏伝』文公十八年に「先君周公制禮曰、則以觀德、德以處事、事以度功、功以食民。」の記述がある。また、林泰輔『周公と其時代』（名著普及會、１９８８年９月）Ｐ９１～１０７を参照。

［５］ －朱子『論語集註』では、季孫子が辛抱して、何でもやってしまうと解釈する。

［６］ －鄹とは、魯国の邑の名前で、孔子の父はこの邑の大夫をしていた。「鄹人の子」には、田舎の青二才という軽蔑の響きがある。

［７］ －「告朔」の言葉は、『春秋左氏伝』文公六年に見える。昔は、諸侯が前年の末に天子より受けた暦と政令を廟に納めておき、毎月の始めに羊を廟に供えて、その月の暦と政令を国内に発布する礼のこと。

参考文献

[1] 中島徳蔵『論語の組織的研究』（大日本出版株式会社、１９４１年２月）。この書籍は、「論語」叢書六（大空社、２０１１年１０月）に所収されている。

[2] 諸橋轍次 『掌中論語の講義』（大修館書店、１９６８年５月）。